

## 第 28 回 高橋記念賞受賞者表彰

高橋記念賞は、故高橋愛次氏の功労を記念し、旧社団法人軽金属協会および旧軽金属精錬会を經由して遺族および扶桑軽合金株式会社（現：株式会社アーレスティ）より寄贈された基金によりアルミニウム合金鋳物・ダイカスト製品の製造ならびに関連のある工業技術の進歩発展に寄与した現場技能職を対象に贈られる。高橋記念賞選考委員会（委員長 金谷輝人）の審査を経て、9月22日（木）に開催された軽金属学会第70回理事会において慎重審議の結果、下記のとおり4名の授賞を決定、(社)軽金属学会第109回秋期大会第1日目の11月12日（土）に千葉工業大学において表彰式を挙行了た。

### 受賞者

#### 表彰理由

前田純郎君は、1969年にホクセリアルミニウム株式会社（現：新日軽株式会社）に入社以来、30年以上にわたって溶解鋳造分野に携わり、新技術の開発、溶解工程の改良等で多大の成果を上げてきた。

この間、例えば、現場の鋳型設備におけるフロート式からホットトップ式への変更や溶湯処理設備のインライン化等に主力メンバーとして貢献した。また、1992年に、富山県小矢部市に鋳造、押出、表面処理、加工、組立、出荷まですべての工程を持つ新工場を建設した際に、最も重要な生産ラインの立上げ部分を任せられ、具体的に作業手順を決め、当初の設計を上回る生産量を達成した。2000年には、溶解炉にリジェネレーターの導入を任せられ、作業手順をルール化し、リジェネレーターの効果を十分に引き出すことに成功した。その後のたゆまない改善により、作業時間を導入時の5分の1まで短縮することができている。

現在も新入社員の教育に力を注ぎ、中堅社員に対しては改善の目の付け所を実践により示し続けている。



前田 純郎 君  
(新日軽株式会社)

### 受賞者

#### 表彰理由

和田康之君は、1971年に神戸製鋼所に入社以来33年間、一貫してアルミニウム金型鋳造に従事してきた。入社初期には、当時最大級の2000Tコールドチャンバダイカストの鋳造業務に従事し、アルミニウムダイカスト製品の品質向上に大きく貢献した。その後のモーターレーゼーションの拡大に伴い、低圧鋳造による1Pアルミホイールの量産化に取組み、国内で先駆けて鋳造方案および鋳造条件を確立させるとともに、特に、鋳造機の段取りの改善、金型予熱方法の改善を行い量産化に大きく貢献した。

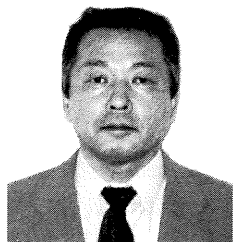
1989年には、独自技術の高圧鋳造法（KPH: Kobe Premium High Pressure Die Casting）による自動車用エンジンマウントの鋳造技術に取組み、生産性の向上、専用離型材の開発による湯廻り改善、冷却方法改善による品質向上を達成し、鋳造部門の業績改善に貢献した。更に2001年からは、自動車サスペンションアーム用メカニカルプレス鍛造品の素材内製化に向けて、横型連続鋳造設備の立上げにも持ち前の指導力を発揮して、鍛造品のコストダウンに大きく貢献した。

現在、同君は金型鋳造系の係長として、これまで数々の新たなプロセスを立上げた豊かな経験を活かしながら更なる品質向上と後進の指導・育成に尽力している。



和田 康之 君  
(株式会社神戸製鋼所)

## 受賞者



小倉 均 君

(日本軽金属株式会社)

## 表彰理由

小倉 均君は、1969年4月に日本軽金属株式会社苫小牧工場に入社し、検査係に配属され、苫小牧工場の電解炉で精錬されたメタルやスラブ・ビレットの分析業務に約13年間携わった。その間、メタルの純度を悪化させないため操業担当者と連携のもと、電力原単位や電解技術の向上に寄与した。その後、苫小牧工場での豊富な経験や実績を生かすため、蒲原製造所管理課分析係へ転勤し、製品の品質管理に関係して、特に微量元素の含有量に注目した発光分析や湿式分析を行い、顧客からも信頼される分析値を提供してきた。

現在は、日本軽金属株式会社メタル合金事業部の最重要工場となる、新塊ベースのアルミニウム鋳物合金インゴットを製造している幸田工場に籍を置いている。ここでは分析技術に関するすべての責務を果たすとともに、顧客からの数多い分析相談についても積極的な支援、指導を行っている。アルミニウム鋳物合金が世界的に逼迫、さらに市場がグローバル化されることにより、決められた成分管理は極めて重要である。

アルミニウムは自動車の軽量化に多大の貢献を果たしているが、小倉君は、その成分管理を支配する分析技術という地道な仕事を通じてその一翼を担っている。

## 受賞者



野藤 稔 君

(昭和電工堺アルミ株式会社)

## 表彰理由

野藤 稔君は、1968年に昭和アルミニウム株式会社（現：昭和電工堺アルミ株式会社）に入社し、7年間アルミニウムの溶解鋳造の生産に従事した後、以後の30年間は、溶解鋳造部門および精製部門の設備担当に従事してきた。この間に高純度アルミニウム精製設備1号機、2号機の設備立上げや設備不具合の改善、生産性向上に精力的に取り組んだ結果、設置当初の約2.5倍の生産性を得るまでになり、当社の電解箔シェア業界No.1の水準を築き上げた中には、同君のこれらの活躍がその一端を担ってきた。

またアルミニウム溶解炉・保持炉の溶湯攪拌装置の導入および改善、ドロス除去の省力化およびドロス堆積防止のための改善などを行い、高温下での作業者の環境改善、省力化が大きく進んだ。これは同君の多大な貢献によるものである。更に、溶解炉バーナーに排熱回収型バーナーを導入する計画にも加わり、最適燃焼条件の検討などを進め、約30%の大幅な省エネルギー化を図った。

現在、同君は、その人柄と情熱をもって、更に新たな課題に取り組んでいるのみならず、後進の育成にも努めている。